

星あかり

泉鏡花作

全一章

もとより何故なにゆゑといふ理わけはないので、墓石はかいしの倒れた
のを引摺ひきずり寄せて、二ツばかり重ねて臺だいにした。

其その上うへに乗のつて、雨戸あまどの引合せひきあわせの上うへの方ほうを、ガタ
く動うごかして見みたが、開あきさうにもない。雨戸あまどの中うちは、
相州さうしゅう西鎌倉ししかまくら亂橋らんだばしの妙長寺めうちやうじといふ、法華宗ほつけしうの寺てらの、本ほん
堂だうに鄰となつた八疊やふの、横よこに長い置床おきどこの附ついた座敷ざしきで、
向むかつて左手ゆんでに、葛籠つづら、革靴かばんなどを置おいた際わきに、山科やましな
といふ醫學生いがくせいが、四六しりくの借蚊帳かりかやを釣つつて寝ねて居ゐるの
である。

聲こゑを懸かけて、戸とを敲たいて、開あけておくれと言いへば、
何なんの造作さうさくはないのだけれども、止よせ、と留るめるのを
肯きかないで、墓原はかはらを夜中よなかに徘徊はいくわいするのは好い心持こころもちのも
のだと、二ツ三ツ言争いひあつて出でた、いまのさき、内うちで
心張棒しんはりぼうを構かまへたのは、自分じぶんを閉出しめだしたのだと思おもふか

ら、我慢にも恃むまい。

冷たい石塔に手を載せたり、湿臭い塔婆を掴んだり、花筒の腐水に星の映るのを覗いたり、漫歩をして居たが、藪が近く、蚊が酷いから、座敷の蚊帳が懐しくなつて、内へ入らうと思つたので、戸を開けようとすると閉出されたことに氣がついた。

それから墓石に乗つて推して見たが、原より然うすれば開くであらうといふ望があつたのではなく、唯居るよりもと、徒らに試みたばかりなのであつた。

何にもならないで、ばたりと力なく墓石から下りて、腕を拱き、差俯向いて、ぢつとして立つて居ると、しつきりなしに蚊が集る。毒蟲が苦しいから、もつと樹立の少い、廣々とした、うるさくない處をと、寺の境内に氣がついたから、歩き出して、卵堵場の開戸から出て、本堂の前に行つた。

然まで大きくもない寺で、和尚と婆さんと二人で住む。門まで僅か三四間、左手は祠の前を一坪ばかり

り花壇くわだんにして、松葉牡丹まつばぼたん、鬼百合おにゆり、夏菊なつぎくなど雑植まぜうゑの
繁しげつた中に、向日葵ひまわりの花は高く蓮はすの葉はの如ごとく押被おつかぶさ
つて、何時いつの間まにか星ほしは隠かくれた。鼠色ねずみいろの空そらはどんよ
りとして、流ながるゝ雲くもも何なんにもない。なか／＼氣きが晴せい々
しないから、一層いっそう海端みづたへ行いつて見みようと思おもつて、さ
て、ぶら／＼。

門もんの左側ひだりがはに、井戸いどが一個ひとつ。飲水のみみづではないので、極きは
めて鹽しほツ辛つらいが、底そこは浅あさい、屈かんでざぶ／＼、さる
ばうで汲くみ得えらるゝ。石疊いしたゝみで穿下ほりおろした合目あはせめには、此こ
のあたりあたりに産さんする何なんとかいふ蟹かに、甲良かふらが黄色きいろで、足あし
の赤あかい、小ちひさなのが數限かずかぎりなく群むらつて動うごいて居ゐる。毎まい
朝あさ此この水みづで顔かほを洗あらふ、一杯頭いっぱいあたまから浴あびようとしたけ
れども、あんな蟹かには、夜中よなかに何なにをするか分わからぬと思おも
つてやめた。

門もんを出でると、右左みぎひだり、二畝ふたうねばかり慰なぐさみに植うゑた青田あをた
があつて、向むかう正面しやうめんの畦中あぜなかに、琴彈松ことひきまつといふのがあ
る。一昨をとつひ日の晚ばん、宵よひの口くちに、其その松まつのうらおもてに、
ちら／＼灯ひが見みえたのを、海濱かいひんの別荘べつさうで花火はなびを焚たく
のだといひ、否いや、狐火きつねびだともいつた。其その時ときは濡ぬれ

たやうな眞黒な暗夜だつたから、其の灯で松の葉も
すら／＼と透通るやうに青く見えたが、今は、恰も
曇つた一面の銀泥に描いた墨繪のやうだと、熟と見
ながら、敷石を踏んだが、カラリ／＼と日和下駄の
音の冴えるのが耳に入つて、フと立留つた。

門外の道は、弓形に一條、ほの／＼と白く、比企
ヶ谷の山から由井ヶ濱の磯際まで、斜に鵲の橋を渡
したやう也。ハヤ浪の音が聞えて來た。

濱の方へ五六 間進むと、土橋が一架、並の小さ
なのだけれども、滑川に架つたのだの、長谷の行合
橋だのと、おなじ名に聞えた亂橋といふのである。

此の上で又た立停つて前途を見ながら、由井ヶ濱
までは、未だ三町ばかりあると、つく／＼然う考へ
た。三町は蓋し遠い道ではないが、身體も精神も共
に太く疲れて居たから。

しかし其まゝ素直に立つてるのが、餘り辛かつた
から又た歩いた。

路の兩側しばらくのあひだ、人家が断えては續いたが、いづれも寢静まつて、白けた藁屋の中に、何家も何家も人の氣勢がせぬ。

其の寂寞を破る、跫音が高いので、夜更に里人の懷疑を受けはしないかといふ懸念から、誰も咎めはせぬのに、拔足、差足、音は立てまいと思ふほど、なほ下駄の響が胸を打つて、耳を貫く。

何か、自分は世の中の一切のものに、現在、慙く、悄然、夜露で重ツくるしい、白地の浴衣の、しほられた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ濱へ通ずる砂道を辿ることを、見られてはならぬ、知られてはならぬ、氣取られてはならぬといふやうな思であるのに、まあ！

廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝつた杉の葉も、百姓屋の土間に据ゑてある粉挽臼も、皆目を以て、じろじろ睨めるやうで、身の置處ないまでに、右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おど／＼して、其癖、駆け出

さうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありつたけの遅さで、汗になりながら、家々のある處をすり抜けて、やう／＼石地藏の立つ處。

ほつと息をすると、びやう／＼と、頻に犬の吠えるのが聞えた。一つでない、二つでもない。三頭も四頭も一齊に吠え立てるのは、丁ど前途の濱際に、また人家が七八軒、浴場、荒物屋など一廓になつて居る其あたり。彼處を通抜けねばならないと思ふと、今度は寒氣がした。我ながら、自分を怪むほどであるから、恐ろしく犬を憚つたものである。進まれもせず、引返せば再び石臼だの、松の葉だの、屋根にも廂にも睨まれる、あの、此上もない厭な思をしなければならぬの歎と、それもならず。静と立つてると、天窓がふら／＼、おしつけられるやうな、しめつけられるやうな、犇と重いものでおされるやうな、切ない、堪らない氣がして、もはや！ 横に倒れようかと思つた。

處へ、荷車が一臺、前方から押寄せるが如くに動いて、來たのは……頼被をした百姓である。

これに夢が覺めたやうになつて、少し元氣がつく。

曳いて來たは空車で、青菜も、藁も乗つて居はしなかつたが、何故か、雪の下の朝市に行くのであらうと見て取つたので、なるほど、星の消えたのも、空が淀んで居るのも、夜明に間のない所為であらう。墓原へ出たのは十二時過、それから、あゝして、あゝして、と此處まで來た間のことを心に繰返して、大分の時間が経つたから。

と思ふ内に、車は自分の前、ものゝ二三間隔たる處から、左の山道の方へ曲つた。雪の下へ行くには、來て、自分と摺れ違つて後方へ通り抜けねばならないのに、と怪みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道の半あたりでツイ目のさきにあるやうな、大きな、鮮な形で、ありのまゝ衝と消えた。

今は最う、さつきから荷車が唯こつてあるいて、少しも輻輳の音の聞えなかつたことも念頭に置かないで、早く此の懊惱を洗ひ流さうと、一直線に、夜

明に間もないと考へたから、人憚らず足早に進むだ。
荒物屋の軒下の薄暗い處に、斑犬が一頭、うしろ向
に、長く伸びて寝て居たばかり、事なく出たのは濱
由井ヶ濱である。

碧潮金砂、晝の趣とは違つて、靈山ヶ崎の突端と
小坪の濱でおしまはした遠淺は、暗黒の色を帯び、
伊豆の七島も見ゆるといふ蒼海原は、さゝ濁に濁つ
て、果なくおつかぶさつたやうに堆い水面は、おな
じ色に空に連つて居る。浪打際は綿をば束ねたやう
な白い波、波頭に泡を立て、だうと寄せては、ざ
つと、おうやうに、重々しう、翻ると、ひた／＼と
押し寄せるが如くに来る。これは、一秒に砂一粒、幾
億萬年の後には、此の大陸を浸し盡さうとする處の
水で、いまも、瞬間の後も、咄嗟のさきも、正に然
なすべく働いて居るのであるが、自分は餘り大陸の
一端が浪のために喰缺かれることの疾いのを、心細
く感ずるばかりであつた。

妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先
に来た時分とは濱が著しく縮まつて居る。町を離れ

てから浪打際まで、凡そ二百歩もあつた筈なのが、
白砂に足を踏掛けたと思ふと、早や爪先が冷く浪の
さきに觸れたので、晝間は鐵の鍋で煮上げたやうな
砂が、皆ずぶ／＼に濡れて、冷こく、宛然網の下を、
水が潜つて寄せ来るやう、砂地に立つてゝも身體が
揺ぎさうに思はれて、不安心でならぬから、浪が襲
ふとすた／＼と後へ退き、浪が返るとすた／＼と前
へ進むで、砂の上に唯一人やがて星一つない下に、
果のない蒼海の浪に、あはれ果敢い、弱い、力のな
い、身體單個弄ばれて、刎返されて居るのだ、と心
付いて慄然とした。

時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、
氣も上ずつて蹠跟けかゝつた。手が、砂地に引上げ
てある難破船の、纒かに其形を留めて居る、三十石
積と見覚えのある、其の舷にかゝつて、五寸釘をヒ
ヤ／＼と搦んで、また身震をした。下駄はさつきか
ら砂地を駆ける内に、いつの間にか脱いでしまつ
て、跣足である。

何故かは知らぬが、此船にでも乗つて助からうと、

片手を舷に添へて、あわたゞしく擦上らうとする、
足が砂を離れて空にかゝり、胸が前屈みになつて、
がつくり俯向いた目に、船底に銀のやうな水が留つ
て居るのを見た。

思はず、あツといつて失望した時、轟々轟といふ
波の音。山を覆したやうに大敵が來たとばかり
で、――跣足で一文字に引返したが、吐息もなら
ず――、寺の門を入ると、其處まで隙間もなく追絶
つた、灰汁を覆したやうな海は、自分の背から放れ
て去つた。

引き息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがた
ひしと開ける、屋根の上で、ガラ／＼ガラといふ響。
瓦が残らず飛上つて、舞立つて、亂合つて、打破れ
た音がしたので、はツと思ふと、目が眩んで、耳が
聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果てた、
倒れさうな自分の體は、
・夢中で、色の褪せた、
天井の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗く
なつた灯の影に、透かして蚊帳の内を覗いた。

醫學生は肌脱で、うつむけに寝て、蹈返した夜具
への上へ、兩足を投懸けて眠つて居る。

ト枕を竝べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、
片手を投出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯
の片影になつて、一人すや／＼と寐て居るのを、

一目見ると、其は自分、であつたので、

天窓から氷を浴びたやうに筋がしまつた。

ひたと冷い汗になつて、眼をニき、殺されるので
あらうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、
墓原をさまよつて、亂橋から油井ヶ濱をうるついで
死にさうになつて歸つて來た自分の姿は、立つて、
蚊帳に縋つては居なかつた。

ものゝけはひを、夜毎の心持で考へると、まだ三
時には間があつたので、最う最うあたまがおもいか
ら、其まゝ黙つて、母上の御名を念じた。――人は
恚ういふことから氣が違ふのであらう。

【完】